慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鏡の国の経済学 : アカデミスムと会話
Sub Title	Economics through the looking-glass : academism and conversation
Author	杉浦, 章介(Sugiura, Noriyuki)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2010
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.103, No.3 (2010. 10) ,p.387(1)- 411(25)
JaLC DOI	
Abstract	経済学は, 他の諸科学と同様に, 議論の実践（Discursive Practice）の一形態である。この経済学における議論の実践についての理解を深めようとすれば,「経済学のレトリック」の研究が不可欠となる。その理由は, 経済学者は, その学問的実践の中で, 経済学独自の社会的・制度的な制約条件の下で広義の発話を行い, 読者や同僚を説得しようと試みているからである。そのような経済学における議論の実践には, 異なるレベルの3 種類の議論が含まれている。それらには, ①現実の経済そのものについての議論, ②経済学の学問的成果についての議論, そして, ③経済学における議論の実践の妥当性や適切性についてのメタディスコース, があるが,「経済学のレトリック」の研究は, 第3 のメタディスコースと他の2 つの異なるディスコースとの関係に関わっている。 本稿におけるレトリックの分析により, 経済学の会話を阻むものとして, ①メタディスコースへの無関心に起因する学問的視野・関心の狭隘化, ②技術的高度化による根拠なき厳密化（第2 のディスコースの無批判な称揚）, ③現実の経済問題解決（第1 のディスコース）を回避する非現実化, などが明らかになる。 Economics, as well as other sciences, is a form of discursive practice. When trying to deepen the understanding of discursive practice in economics, the study of "Rhetoric of Economics" is indispensable. This is because in their academic practice, economists speak under social and institutional restraint conditions in a broad sense specific to economics to convince readers and colleagues. Such discursive practice in economics contains three different levels of discussion: 1) discussions of the real economy itself; 2) discussion of the academic results of economics; and 3) meta discourse regarding the validity and appropriateness of the discursive practice in economics; the study of "Rhetoric of Economics" relates to the third meta discourse and its relationship with the other two different discourses. Through the analysis of rhetoric in this study, as hurdles to the dialogue in economics, 1) a narrow academic vision/interest stemming from indifference to meta discourse; 2) groundless strictness due to technological advancement (uncritical praise of the second discourse); and 3) the idea of avoiding the solution to realistic economic problems (first discourse), and so on, are clarified.
Notes	会長講演
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20101001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鏡の国の経済学―アカデミスムと会話―
Economics through the Looking-glass:　Academism and Conversation

杉浦 章介(Noriyuki Sugiura)

経済学は，他の諸科学と同様に，議論の実践（Discursive Practice）の一形態である。この経済学における議論の実践についての理解を深めようとすれば，「経済学のレトリック」の研究が不可欠となる。その理由は，経済学者は，その学問的実践の中で，経済学独自の社会的・制度的な制約条件の下で広義の発話を行い，読者や同僚を説得しようと試みているからである。そのような経済学における議論の実践には，異なるレベルの 3 種類の議論が含まれている。それらには，①現実の経済そのものについての議論，②経済学の学問的成果についての議論，そして，③経済学における議論の実践の妥当性や適切性についてのメタディスコース，があるが，「経済学のレトリック」の研究は，第 3 のメタディスコースと他の 2 つの異なるディスコースとの関係に関わっている。
本稿におけるレトリックの分析により，経済学の会話を阻むものとして，①メタディスコースへの無関心に起因する学問的視野・関心の狭隘化，②技術的高度化による根拠なき厳密化（第 2 のディスコースの無批判な称揚），③現実の経済問題解決（第 1 のディスコース）を回避する非現実化，などが明らかになる。

Abstract
Economics, as well as other sciences, is a form of discursive practice. When trying to deepen the understanding of discursive practice in economics, the study of “Rhetoric of Economics” is indispensable. This is because in their academic practice, economists speak under social and institutional restraint conditions in a broad sense specific to economics to convince readers and colleagues. Such discursive practice in economics contains three different levels of discussion: 1) discussions of the real economy itself; 2) discussion of the academic results of economics; and 3) meta discourse regarding the validity and appropriateness of the discursive practice in economics; the study of “Rhetoric of Economics” relates to the third meta discourse and its relationship with the other two different discourses.

Through the analysis of rhetoric in this study, as hurdles to the dialogue in economics, 1) a narrow academic vision/interest stemming from indifference to meta discourse; 2) groundless strictness due to technological advancement (uncritical praise of the second discourse); and 3) the idea of avoiding the solution to realistic economic problems (first discourse), and so on, are clarified.

「三田学会雑誌」103 巻 3 号（2010 年 10 月）

会 長 講 演

鏡の国の経済学

——アカデミスムと会話——[1]

杉　浦　章　介

「これじゃまるで会話になってないわ，こっちのいうことには全然こたえてくれないんだもの」
ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』[2]

「経済学者は，考えられるすべての人間行動を研究してきたが，経済学自身については，してこなかった。」
アリオ・クラマー『経済学は会話である』[3]

要　　旨

経済学は，他の諸科学と同様に，議論の実践（Discursive Practice）の一形態である。この経済学における議論の実践についての理解を深めようとすれば，「経済学のレトリック」の研究が不可欠となる。その理由は，経済学者は，その学問的実践の中で，経済学独自の社会的・制度的な制約条件の下で広義の発話を行い，読者や同僚を説得しようと試みているからである。そのような経済学における議論の実践には，異なるレベルの 3 種類の議論が含まれている。それらには，①現実の経済そのものについての議論，②経済学の学問的成果についての議論，そして，③経済学における議論の実践の妥当性や適切性についてのメタディスコース，があるが，「経済学のレトリック」の研究は，第 3 のメタディスコースと他の 2 つの異なるディスコースとの関係に関わっている。

本稿におけるレトリックの分析により，経済学の会話を阻むものとして，①メタディスコースへの無関心に起因する学問的視野・関心の狭隘化，②技術的高度化による根拠なき厳密化（第 2 のディスコースの無批判な称揚），③現実の経済問題解決（第 1 のディスコース）を回避する非現実化，などが明らかになる。

キーワード

現代経済学の自画像，経済学のレトリック，メタディスコース，アリオ・クラマー

---

(1)　本稿は，2009 年 12 月 17 日に行われた経済学会会長講演会における筆者の講演「経済学の冒険——伝統と革新——」の内容に加筆修正を行ったものであり，論題も内容をよりよく表現するために「鏡の国の経済学——アカデミスムと会話——」と改題されている。

(2)　ルイス・キャロル著，矢川澄子訳（1994）『鏡の国のアリス』新潮文庫，p.103。

(3)　アリオ・クラマー著，後藤和子／中谷武雄訳（2010）『経済学は会話である：科学哲学・レトリック・ポストモダン』日本経済評論社，p.52（原著：Arjo Klamer (2007) *Speaking of Economics: How to Get in the Conversation*, Routledge）。

1　鏡の中の自画像

長い伝統と輝かしい実績のある経済学会の会長として所信を表明できることを大変な栄誉であると思っております。この経済学会に限らず，一般に，学会における会長講演には概ね次の三つのタイプのものがあるように思われます。

その第一のものは，会長自身が専門とする特定の研究領域における学問の現状と課題をテーマとするものであります。例えば，ゲーム論を専門とする学者が，ゲーム論研究の最前線を語る，というものであります。

第二のものは，その学会に属する研究者の多くが直面する大きなテーマ，しかも，社会的にみても重要なテーマについて語る，というものであります。例えば，今日でいえば，グローバルな金融秩序の再構築というテーマや，地球環境と持続可能な経済成長といったテーマなどが考えられます。

そして，第三のものは，その学問分野の研究者たちが行っている研究の実践の姿やその特徴を，歴史的な回顧も含めて，描き出すというものであります。いわば，研究分野の自画像を描くということにでもなりましょう。

本日，お話ししたいのは，これらのうちの最後の第三のタイプの話であり，経済学者がどのように研究を実践しているのか，集団としての経済学者たちはどのような行動をとっているのか，あるいは，経済学者たちが，どのように発想し，そのアイディアを同僚の経済学者たちと話し合っているのか，それらの特色を描き出すことを通じて，経済学についての自己理解を深めることを目的としているものであります。

この第三のタイプの話をすることには，三つの理由があります。

第一の理由は，私自身の研究領域は経済地理学や都市・地域経済論であり，こうした領域は経済学の王国の中では辺境に位置しており，しかも，経済学の王国の中央で活躍する多くの経済学者たちは，自分たちの取り組んでいる研究上のテーマや方法，そして，日々の研究実践のあり方について，それらはあまりにも自明であるために，自画像を描くことに関心がないのではないかと思われるからです。ですから，辺境の住人の特権として辺境からみた王国の自画像を描くことには充分，意義があるように思われるのです。

第二の理由は，経済学会という組織の性格に由来するものです。この経済学会という組織は，通常の学会とは異なって，慶應義塾大学の経済学部において専任者として教鞭をとる研究者や，慶應義塾大学の大学院で学んだことのある研究者を中心に構成されています。ですから，それぞれの会員の研究上の専門分野は多岐にわたり，研究上の方法論や基本的関心や議論の前提には統一性や共通性は実質的にはないといってもよいと思われます。ですから，会長講演のテーマとしては，多様な会員にとって共通の話題ともなり，議論をよぶテーマについて取り上げるのが適当ではないかと

考えたわけであります。

さらに，第三の理由として，経済学会の活動の一環として刊行されているジャーナル『三田学会雑誌』を購読している人々の中には，経済学部生や経済学研究科の大学院生がいます。経済学を学ばんとするこうした若き学部生・院生たちにも，本講演が何らかのメッセージを届けることができればと思ったからです。

さて，そのような意図の下に，何についてお話ししたいのかといえば，「経済学者は，一体何をしている専門家なのか？」という問に光をあててみることだ，ということになります。いかにも漠然とした話のように聞こえるかもしれませんが，学問分野における自己省察の試みとでも理解していただけたらと思います。英語の reflection という言葉には，光の反射という意味と，熟考や反省という意味の両方がありますが，鏡に映し出される自画像によって経済学という研究分野の特質について反省を試みるという意味であります。

本稿でしばしば引用されるアリオ・クラマー（Arjo Klamer）は，この分野の第一人者の一人でありますが，経済学的ディスコースには，三つの異なるレベルのディスコースがあるといっています。第一のものは，現実の経済（Economy）のレベルでのものです。場合によってはビジネス・ディスコースも含まれるといってよいでしょう。これに対して，第二のレベルの経済学的ディスコースは，経済学の理論やモデル，そして計量的検証についての経済学者の間のディスコースであります。例えば，インフレ率と失業率の関係を示すフィリップス曲線の妥当性，というようなディスコースは，現実の経済の中での株や金利の動向についてのディスコースとは質を異にします。非自発的失業についても，第一のレベルにおける失業問題と第二のレベルのケインジアン経済学の枠組みの理論的妥当性という問題とは異なるレベルでのディスコースであるといえます。さらに第三のレベルのものは，哲学や方法論そしてレトリックに関するものです。これは，メタディスコースともよばれるものです。この第三のレベルでは，そもそも，経済学におけるディスコースの妥当性はどのようにして確保されるのか，あるいは，経済学のディスコースはどのようにして成立するのか，そして，それは他の学問分野におけるディスコースとはどこが似ていて，どこが異なっているのか，などの問に答えようとするものです。(4) いうまでもなく，以下の話は，第二のレベルのディスコースを主に素材にしながら，第三のレベルにおける経済学のメタディスコースを試みるものです。

ここでディスコースとよんでいるのは，文字どおり，言語を通じて思想や考えを他者に伝えること，ですから，広い意味では，「会話」（conversation）という意味として了解してもよいでしょう。議論や論議は，argument ないしは argumentation とよばれるものです。そして，このような discourse, conversation, argument, argumentation などは日常生活においても，あるいは学問的研究におい

---

(4) Arjo Klamer (1990) "Towards the Native's Point of View: The Difficulty of Changing the Conversation", in Don Lovoie (ed.) *Economics and Hermeneutics*, Routledge, p.22.

ても常に何らかの形で関わりのあるものといえます。こうしたものをまとめて，discursive practice とよんでいます。

ところで，私自身の専門分野の一つである地理学では，研究対象が地形や気候のような自然現象から，経済や社会文化などの人文社会現象まで含まれることもあって，学問的なアイデンティティについては繰り返し議論がなされてきました。最も古い学問分野であると同時に，歴史の変化とともに研究する対象にも大きな変化がみられます。そのような伝統と変化の中で，地理学とは何か，ということを定義しようとすれば，結局，「地理学とは，地理学者の行っていることである（Geography is what geographers do.）」ということになります。しかし，この定義についてよく考えてみると，循環論的な同義反復に陥っていることに気づきます。なぜならば，それでは，地理学者とは一体誰なのか，という定義をもとめるとなると，当然のことながら，「地理学者とは，地理学を行う人々である（Geographers are those who do geography.）」ということになるからです。最も包括的と思われる定義は，循環的なものとなり，一見，内容的には空疎なものにすぎない，ということにもなりますが，それはあくまで形式論理の指し示すところにすぎないともいえます。そのわけは，ある学問分野の研究や教育に従事している専門家が，専門家として常日頃，どのような仕事に従事し，同僚である同じ専門家と話を交わし，大学や大学院の組織運営を行い，集団の一員として学会活動に携わっているのかを，明らかにするという試みは，あるいは意外に思われるかもしれませんが，それほど突飛なものとはいえません。社会学者のロバート・K・マートンは，科学者からなる集団の社会学の実態を解明することによって，独自の知識社会学の領域を拓きました[(5)]。また，自然科学についても，理論物理学や分子生物学，医学などの分野では，このような視点から学問分野の特徴を明らかにする試みは珍しくありません。

経済学についても，このような視点から経済学の特質を解明しようと試みるグループがすでに存在しています[(6)]。このようなアプローチは，学問分野の自画像を描く上で有用な方法をもたらすと同時に，どうしたら経済学者となることができるのか，という意味で，学部の学生や大学院で学んでいる研究者の卵諸君にとっても有益な情報を提供できるのではないかと思っています。

ところで，本稿の題名を『鏡の国の経済学』としましたが，古来，洋の東西を問わず，鏡というメタファーは時代を映し出し，その中にドラマを再生するものとして多用されてきました。

以下の論考においては，単に経済学者の学問的実践の姿の一端を映し出すだけではなく，よりその本質に迫るために，「フランス絵画の 19 世紀」というもう一つの鏡をつかうこととし，いわば，合わせ鏡の世界に映し出される経済学の実像と虚像を明らかにしてゆきたいと考えています。

---

(5)　Robert K. Merton (1973) *The Sociology of Science: Theoretical and Empirical Investigations*, University of Chicago Press.

2 「フランス絵画の 19 世紀」

2-1　アカデミー絵画とモダニスム

昨年（2009 年）の夏（6 月 12 日～ 8 月 31 日）に，横浜美術館において「フランス絵画の 19 世紀」という大変興味深い展覧会が開催されました。西洋近代絵画が最も革新的であり創造的であった 19 世紀のフランスに焦点をあてたものでしたが，この展覧会では，みなさんがよく知っている画家たち，例えば，ドラクロワやマネ，モネやルノワールの作品によって代表されるようなモダニスムの作品ではなく，これらの画家たちが活躍し，苦闘していた時代に，フランス美術界の権威として君臨したフランス学士院の美術部門である美術アカデミーから生まれた，いわゆる「アカデミー絵画」の流れの側から，この 19 世紀のフランス絵画の基本的特質を明らかにしようとするものでありました。

通説では，アカデミーを拠点とするアカデミー絵画やその信奉するアカデミー主義は，フランス革命以後に台頭する市民・ブルジョワ勢力の美術におけるモダニスム（近代主義）による革新に対する抵抗勢力とされてきました。この展覧会では，20 世紀以降今日まで，軽んぜられ，疎んぜられて，いわば，歴史的な背景としてしか扱われてこなかった，この 19 世紀アカデミー絵画に焦点をあて，いわば通説における「図と地」を反転させながら，19 世紀のフランス絵画の全体像を描こうとするものでありました。

華やかで革新に満ちた 19 世紀フランスの絵画史の概要については，恐らく，次のような理解が一般的なのではないかと考えられます。少し長くなりますが引用してみましょう。

> 「絵画ではフランス革命・ナポレオン時代にダヴィッドが格調の高い古典主義の傑作を残しアングルに引きつがれたが，やがてドラクロワらの情熱的，幻想的なロマン主義の画風にかわっていった。19 世紀のなかば以来，写実主義・自然主義の流れは絵画にもおよび，フランスの農民生

---

(6)　経済学に関するメタディスコースについて，レトリックの観点から問題を提起したのは，Donald N. McCloskey であった。Donald N. McCloskey (1985) *The Rhetoric of Economics*, University of Wisconsin Press. Arjo Klamer, Donald N. McCloskey and Robert M. Solow (1988) *The Consequences of Economic Rhetoric*, Cambridge University Press. 経済学者の言語的特性と経済学のディスコースについての論文集として，Warren J. Samuels (ed.)(1990) *Economics as Discourse: An Analysis of the Language of Economists*, Kluwer Academic Publishers. この論文集には，ポール・サミュエルソンの教科書『経済学』の各版別の比較対照研究の Arjo Klamer の論文が収められている。経済学と解釈学（Hermeneutics）との関連から集められた論文集には，Don Lavoie (ed.)(1990) *Economics and Hermeneutics*, Routledge, があり，McCloskey や Klamer の論文も収録されている。David Colander and Arjo Klamer (1987) “The Making of an Economist”, *Journal of Economic Perspectives*, No. 2, Fall. また，広く人文社会科学の分野におけるレトリックの問題に関する論文集には，John S. Nelson, Allan Megill and Donald N. McCloskey (eds.) (1987) *The Rhetoric of the Human Sciences: Language and Argument in Scholarship and Public Affairs*, University of Wisconsin Press.

活を主題とした風景画で知られるミレーや，ドーミエ，クールベらがでた。この世紀の末に近づくと，マネ・モネ・ルノワールらの印象派がうまれ，外光による色の変化を重視して明るい絵をえがいた。またセザンヌ・ゴーガン，オランダのゴッホらはこれを発展させて独自の画風をひらき，20 世紀の絵画に影響をあたえた。[(7)]」

この叙述文にどこかで出会ったことに気づく人もいるかもしれません。そうです，これは高校の世界史の教科書に記述されている 19 世紀の絵画の流れについての文章からの抜粋です。この文が表しているように，多くの人々は，19 世紀におけるフランスの絵画の歴史は，次々と生起する革新の連続とめまぐるしい変化の流れの中で数多くの著名な画家たちを生んできた，というものでしょう。

しかし，19 世紀のフランス絵画の歴史の流れをもう少し仔細にみてゆくと，革新の連続，直線的な進歩と発展という考え方は修正を余儀なくされます。

産業革命と市民革命を経た 19 世紀フランス社会は急速に変貌を遂げてゆきますが，19 世紀の美術界は，大革命にもかかわらず，フランス学士院の美術アカデミーとその教義，そしてその主催する「サロン」（官展）によって事実上支配されていました。また，配下の国立美術学校の教育を通じて，アカデミーの教義を再生産していたのです。何がよい美術であるのか，あるいは，どれが価値のある作品なのかは，アカデミーの権威によって決められていたのです。そのアカデミーが芸術の手本としたのは，古典古代の芸術であり，ルネサンス期の古典古代を題材にした作品，特にラファエロの作品でありました。そして，制作に当たっては，最も価値の高い題材は「歴史画」であり，しかも高い精神性を表現するものとしての「裸体画」でありました。また，技法としては，絵具を何重にも重ね合わせたスムーズな筆致と，画面の背景には作品の内容を暗示する象徴的事物が配されていることも，よき絵画であることの約束事でありました。

2-2　アカデミーへの挑戦

やがて，古典古代の歴史画や裸体画を中心とするアカデミー絵画の教義や約束事に疑問を呈したり，反発する画家たちが現れてきます。卑近な日常の題材をテーマとする風俗画や自然そのものを対象とする風景画，そして，娼婦などの裸体画は，美術アカデミーへの挑戦となって革新的な画家たちによって支持されるようになります。こうした動向の背景には，絵画だけではなく，文芸や音楽などを含む芸術一般や社会思想そのものにおける近代主義（モダニスム）の考えが社会のあらゆる領域において急速に台頭してきたということがあります。

1874 年（明治 7 年），後に「印象派展」とよばれるようになる「グループ展」が開催され，これまで「サロン」という形式で独占されてきた絵画の発表と商取引の機会が新たに開かれることとなりました。[(8)] このようにして，19 世紀後半のフランス絵画の世界は，アカデミーやサロンとともに，新

（7）　江上波夫他編著（2000）『詳説世界史』山川出版社，pp.242～243。

興ブルジョア勢力を背景とする画商や批評家たちによって動かされてゆくようになります。しかし同時に，このような動きの中で，美術アカデミーの側でも新しい考えや技法を受容し，アカデミーの教義を修正する動きも現れ始めます。

パリ第4大学名誉教授ブリュノー・フカールによれば，19世紀末には，「逆説的にも，アカデミーはリベラル（自由主義）になっていた。いくつかの本質的価値は遵守されていたものの，過度に強制的なシステムであることは回避されていたのである。19世紀末に至り，伝統の教えへと回帰するのは，むしろ近代的な芸術家たちの方であった。(9)」

フカールは，芸術の営みは極めて複雑で，アカデミスム対近代主義者というような二項対立によって要約できるようなものではない，としています。その上で，アカデミスム絵画のような確固たる伝統の背景を理解することなしには，実は，近代主義的な革新的絵画の意味も充分に明らかにはなりません。ところが，このようなアカデミスム絵画は発表当時は絶大な社会的な影響力をもっていたにもかかわらず，今日ではあまり顧みられることも，評価されることもありませんし，それらの作品に系統的に接する機会も多くはありません。ですから，今回の展覧会はまたとない貴重な機会を与えてくれた企画であったといってもいいでしょう。

2-3　アカデミーの影響

日本における西洋絵画の受容の歴史とその後の発展を考えるとき，実は，19世紀のアカデミスム絵画と美術アカデミーの果たした役割は極めて重要なものがあります。明治後半から国費留学生として次々と渡仏し，西洋近代絵画を学んだ多くの日本人画家が師事したのは，他ならぬ美術アカデミーの実力者たちだったのです。山本芳翠にしろ，黒田清輝にしろ，藤島武二にしろ，近代日本に「洋画」の伝統を築いた先駆者たちは，自然主義や印象派の画家たちではなく，アカデミスムから直接，学び，その教義や技法，そしてその教育システムを日本に導入したといえます。

アカデミーの存在の大きさを表すエピソードとしてドラクロワの事例があります。ロマン主義の代表的画家であるドラクロワは，1857年ついに悲願のフランス学士院の美術アカデミーの会員となることができました。それは，最初に立候補した1937年から8度目の挑戦であり，20年の歳月を要したものでした。ドラクロワはその間，画家としての名声を既に確立していましたが，何としてでも美術アカデミーの会員となることはあきらめなかったといわれます。そして，作風の中にも古典主義的なテーマを意識的に取り入れるようになったとされています。(10)

また，一般には印象派の画家として理解されているルノワールについてですが，1880年代に入

---

(8)　印象派展の成立にいたる背景や，第1回から第8回にいたるグループ展の内容や変質について詳細な検討がなされているのは，島田紀夫（2009）『印象派の挑戦：モネ，ルノワール，ドガたちの友情と闘い』小学館。

(9)　ブリュノー・フカール「アカデミスムと近代性」，図録（2009）『フランス絵画の19世紀』pp.8～9。

ると，それまでの光と色彩に溢れた印象派風の画風に行き詰りを感じたルノワールは度々地中海方面への旅行に出かけるようになります。イタリア旅行では，ルネサンス絵画の巨匠で，美術アカデミーの教義においては手本とされてきたラファエロのフレスコ画や聖母像に深い感銘を受け，パリに戻ってからは，乾いた筆致で知られる「アングル様式」の作品を試みるようになります。アングルは，美術アカデミーにおける，ダヴィッドの実質的後継者として君臨しました。

この二つのエピソードは，守旧派でありエスタブリッシュメントと目されていたアカデミーと，その教義に必ずしもなじまない革新派のモダニスムの画家たちは，決して，対立と反目を繰り返してばかりいたわけではなかったということを如実に物語っています。そして，互いに他の存在に触発され，影響を及ぼし合っていたことを示しています。フカールのいうように，19 世紀のフランス絵画における創造性は極めて複雑な現象であるといえましょう。

3　アカデミスム経済学の実践

現代経済学の実践の姿を捉えることでその自画像を描こうとするならば，今みてきたような「フランス絵画の 19 世紀」という話は，どのようなことを教えてくれるのでしょうか。また，そもそも，この両者を比較することには意味があるのでしょうか。

現代経済学の始まりをいつとするのかという問には，さまざまな考えがあると思われますが，ジョン・M・ケインズの『一般理論』の刊行をもってその始まりとする点については充分に理由がある妥当なことと思われます。ケインズの『一般理論』の刊行された 1936 年から今年（2009 年）で 73 年経っています。この歳月を 19 世紀のフランス絵画の歴史に当てはめてみますと，いかに大きな変化が起こっていたかがわかると思います。19 世紀の初頭，美術アカデミーの中心的存在であったダヴィッドがナポレオン・ボナパルトの戴冠式の模様を描いた『皇帝夫妻の戴冠』（1807）を完成した頃，あるいは，アングルが「王座のナポレオン 1 世」（1806）を発表した時期を起点とするならば，73 年後の 1880 年頃には，既に 2 度のパリ万国博覧会が開催され，印象派展も第 5 回となっていますが，この第 5 回展には，セザンヌ，モネ，ルノワール，シスレーなどはもはや不参加となっています。また，3 年後の 1883 年には，モダニスムの中心人物であったマネが没します。その翌年には，かつては，裸体の女と着衣の男を描いた「草上の昼食」で物議を醸し，娼婦の裸体画である「オランピア」でセンセーショナルなスキャンダルを引き起こしたマネの回顧展が他でもないアカデミーの美術学校で開催されました。明らかに大きな時代の流れの変化を物語っていると思われます。他方で，現代経済学の場合もこの 70 年余の間に大きな変化が起こってきたことはご存知のとおりです。

（10）ドラクロワにおける古典主義とロマン主義についてアカデミスムとの関連で詳しいのは，パリ第 4 大学教授バルテレミー・ジョベールの「ドラクロワをめぐる 19 世紀前半のフランス絵画とアカデミスム」，図録（2009）『フランス絵画の 19 世紀』pp.10～20。

3-1 「プロダクト」と「プロセス」

このように，19 世紀のフランス絵画の歴史と現代経済学の歩みを機械的に比較することには疑問や批判があることと想像されます。19 世紀のフランス絵画は，「芸術（アート）」であり，一方，現代経済学は「科学（サイエンス）」であって，両者は根本的に異なる世界に属している，という考えであります。「アート」は，それ自体完結したもので，作品自体に時代を超えた価値があるのに対して，「サイエンス」は，厳密な科学的方法による理論研究と実証（実験）研究によって，累積的に進歩，発展を重ねる，一つの永続的なプロセスであると看做すことができる，というのがその理由です。

このような，「アート」と「サイエンス」という 2 分法は大まかな目安としてはわかりやすいもので，それはそれなりに充分に意味のあるものといえますが，ここで注意しなければならないことは，「アート」であれ，「サイエンス」であれ，それをプロダクト（products）としてみるのか，それを創造のプロセス（processes）としてみるのか，ということをはっきりと区別することでしょう。さきほどの，美術作品には作品自体に価値がある，という考えは，「アート」をプロダクトとしてみていますが，それに対比されている「サイエンス」については，科学的探究のプロセスが科学の本質として取り上げられています。ところが，「サイエンス」にもプロダクトつまり成果物や作品にあたるものがあります。法則や公式，数式群で表現されたモデル，さらには，DNA などの構造を表現する模式構造図などです。そして，「サイエンス」のプロダクトに関しても，対称性やシンプリシティなど美的な観点からしばしば評価されてきたこともまぎれもない事実です。一方，「アート」のプロダクトについてみると，例えば，印象派の絵画の中でも革新的な点描という画法は，その当時の光と色彩に関する科学的研究の成果を応用したものでもあり，このように，プロダクトとしての「アート」と「サイエンス」には重なり合う部分があるといえます。

次に，プロセスという観点からみると，「アート」と「サイエンス」の間の相違性とともに相似性が一層，際立ってくるように思われます。かつて，科学哲学者のカール・R・ポパーは，「科学的発見にいたる科学的な論理は存在しない」ことを明らかにしましたが，その際，科学者が科学の探求のプロセスで行っていることは，「推測」（Conjectures）と「反駁」（Refutations）であるとしました。このことを，厳密ではありませんが，もうすこしわかりやすくいい換えると，仮説の提示と仮説の反証ということになろうかと思います。さらにポパーによれば，反証といっても，何が真であるかは証明することはできず，ただ単に，何が偽であるかを明らかにすることができるにすぎない，ということになります。そして，反証のテストによってもなお偽であることを立証することができなかった命題（仮説）群だけが生き残り，さらなるテストにさらされる，それが科学的探究のプロセスである，とされています。このポパーの考えは，その後，多くの科学哲学者や科学史家によって反論されたり修正されたりしてきましたが，少なくとも，この「推測と反駁」の命題の基本的論理は反証されず，今でも生き残っています。そして，多くの現代経済学者たちも，実証主義ではなく，この反証主義を受け入れています。「実証」経済学の中核にある統計的手法の論理は，まさに反

証主義そのものです。ですから，実証主義を素朴に信じている経済学者は皆無とはいえないにしても，一流の経済学者になればなるほど，少なくなるのではないかと思います。そしてまた，このことによって，科学的探究のプロセスには，厳密な論理以外の様々な推測の過程がありえることを自覚するようになるといえます。この「推測」のプロセスではもはや，主観と客観というような区別は意味を成さないといってもいいでしょう。

ところで，科学者たちが，推測のプロセスの中でモデルを構築することはよく知られていますが，そのプロセスの中では様々な隠喩（Metaphor）や類比（Analogy）が用いられていることはよく知られているところです。現代経済学の分野では，例えば，ジョン・R・ヒックス卿の経済学のモデルの根底にある隠喩は，簿記における「バランスシート」であるとの研究もあります[(11)]。隠喩や類比によってモデルを構築するということ自体は，そのモデルの価値を高めたり，あるいは逆に低めたりするものではありません。どのようにしてモデルを組み立てたのか，そのきっかけとなるような発想はどこから生まれたのか，こうした疑問を解明すべく，経済学者を初めとする科学者の探求のプロセスを分析することは，単に分析の対象となったモデルの理解を深めるだけではなく，その学問分野の創造性の軌跡を辿るという意味でも重要な観点であると思われます。芸術の歴史や芸術的創造性の研究では，そのような隠喩や類比の研究はスタンダードな方法となってさえいます[(12)]。

3-2　群れをなす経済学者たち

プロセスという観点から，もう一つ重要な点は，「アート」であれ，「サイエンス」であれ，それらは，何らかの社会集団によって営まれているという点です。それぞれの創造性の源泉は，あくまで個々の芸術家や科学者の才能に帰するとしても，それらの人々は何らかの集団の一員として活動することでその業績を評価されてきました。そのような集団から全く隔絶したかたちで芸術的あるいは科学的創造が営まれるということは極めて稀であるといえます。19 世紀のフランス絵画の場合では，一方に，美術アカデミーの面々からなる絶大なる権力を行使する集団が存在し，他方には，ロマン主義，写実主義，自然主義，印象派などとよばれる一群の画家たちとその支持者たちがそれぞれにグループを形成し，さらにサブグループとしてバルビゾン派，ポン＝タヴェン派，ナビ派，新印象主義派などがありました。もちろん，そのようなグループの間を行き来する人もいましたが，そうした事実がグループの存在とその価値そのものを否定するものではありません。

一方，現代の経済学者の場合はどうでしょうか。集団の名前やグループ化のやり方にはいろいろありますが，少なくとも，次のようにグループ分けすることも可能であります。現代経済学の始ま

（11） アリオ・クラマー（2010）前掲書，p.299。

（12） 自然科学における隠喩（メタファー）については，Theodore L. Brown (2003) *Making Truth: Metaphor in Science*, University of Illinois Press, が詳しい。また，メタファー一般について易しく書かれたものとしては，G. Lakoff and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, が参考になる。

りを今，ケインズの『一般理論』の刊行とすれば，それ以降の大きな流れは，ある経済学思想史家によれば，新古典派，マネタリズム，合理的期待仮説派，マクロ経済学のミクロ的基礎付け派（「新しい古典派」ともよばれる），新ケインズ派，などとなります。[13]

これらのグループは，同じような問題意識や方法，学問的関心，そして現実の経済政策や経済問題への対応姿勢，といった点で共通の考え方をもつ人々によって構成されています。先のフランス絵画の場合と同様に，時間的にそれぞれグループ形成の時期も異なります。

しかし，これらのグループに共通していえることは，グループ内に共通の発話の形態が存在し，グループ内のコミュニケーションが充分に確立しているのに対して，グループ間のコミュニケーションは，時としてすれ違いや意思疎通を欠くことが珍しくないということです。例えば，今，マネタリズムとひと括りにしましたが，このグループの牙城はいうまでもなくシカゴ大学であり，シカゴ学派とよぶ場合もあります。現代経済学においては，このグループの中心人物が，ミルトン・フリードマンであったことには異論は少ないと思われます。そして，フリードマンがシカゴ学派の中心人物であった当時，同じシカゴ大学には他にも錚々たる経済学者がいました。スティグラー，コース，ベッカーなどです。これらの大物経済学者はそれぞれの考えをもち，それぞれの経済学的課題に取り組んでいましたが，共通して，現実の経済問題への鋭い関心がありました。ですから，たまたま，昼食をともにすれば，時事経済が話題になり，連邦政府の経済政策や，FRB の金融政策の是非が話題になることは珍しくなかったといわれています。しかし，同じシカゴ大学でも，次の世代にあたる，ロバート・ルーカスを初めとするグループになると，現実の経済政策よりもコンピュータ・プログラムや新しい数学的解法など，より技術的なことがランチの話題となっている，という指摘もあります。事実であるかどうかよりも，ありそうな話ということかもしれません。[14]

集団を形成し，集団によって業績が認知され，評価されるという点では，「アート」も「サイエンス」も共通な点をもっているといえましょう。そして，グループ内のコミュニケーションとグループ間のコミュニケーションに相違が生まれてくるのには，何に関心があり何が重要であるのか，という認識における相違と，そのような認識に基づく発話と会話の形式に相違があるからと考えられます。

3-3 「制度」の中の経済学者たち

ここで，少し視点を変えて，経済学をめぐる「制度」と経済学の実践について考えてみましょう。まず，量的な問題に少し触れてみたいと思います。

（13） R・ハイルブローナー／W・ミルバーグ著，工藤秀明訳（2003）『現代経済学：ビジョンの危機』岩波書店，p.124（原著：Robert Heilbroner and William Milberg (1995) *The Crisis of Vision in Modern Economics*, Cambridge University Press）。

（14） アリオ・クラマー（2010）前掲書，pp.47～48。

19 世紀のフランスにはどれほどの数の画家や，画家志望の人々がいたのか，それに比べてみれば，経済学者や経済学を学ぼうとする人々の数は，比較にならないほどの違いがあります。ある統計によれば，アメリカ合衆国の大学だけでも，毎年，経済学入門の学部のコースを 100 万人の学生が履修しており，そのうち，約 3 万人が毎年，経済学を主専攻としています。また，経済学の研究と教育には，約 13 万人が従事しているということです。[15] 恐らく，アダム・スミス以来のすべての経済学者のうち，現在，存命中で活動している経済学者の数は，半分を超えるものと考えられます。

しかし，19 世紀のフランス絵画の世界も，現代の経済学の世界も，ともに，ある種の「制度的枠組み」の中で，あるいは，そのような「制度」との関連で活動が営まれてきたことも確かなことといえます。10 万人以上の経済学者が，「ブラウン運動」のようにランダムに行動しているとは考えられません。それでは，どのような制度的制約条件が，経済学者の行動に一定の秩序（らしきもの）を与えているのでしょうか。19 世紀のフランス絵画の世界では，美術アカデミーという権威的な制度や，「サロン」（官展）という制度が，厳然として美術界の現実を支配し，美術界を構成するメンバーに対して，ある種の行動を促し，別の種類の行動を規制していました。それでは，現代の経済学においても，このような制度的枠組みは存在するのでしょうか。もし存在するとしたら，それは一体どのようなものなのでしょうか。

大学の教育制度はそのような行動の制約条件の一つといえます。経済学部や大学院経済学研究科は，アカデミックな経済学者の活動に一定の外形的な行動上の制約を課すものであります。しかし，それ以上に重要な制度的要因は，経済学に関する学会という制度であります。この学会という制度によって，経済学者の活動には一つのパターンともいえるものが生まれ，ある種の，行動に関する予測可能性が生じるのです。学会の専門部会における活動や年次総会における発表や講演，そして，学会の専門誌であるジャーナルへの投稿やその編集という活動がこれにあたります。こうした活動こそ，経済学者が経済学者として活動している実践の姿そのものであるといえましょう。

ところが，学会誌にあたる専門ジャーナルについてみると，経済学の分野では，少なくとも 150 種以上ものジャーナルが刊行されていて，毎年，6,500 本以上もの論文が掲載されていますが，その半分に目を通すことなど到底不可能であるといえます。それでは，一体，経済学者は毎年公表される論文にどのように目を通しているのでしょうか。近年は，ジャーナルの電子化が進み，キー・ワード検索によって，各自の研究の関心がある論文を選別することが可能となっていますが，それにしても，検索によって引っかかる論文の数は相当なものとなります。しかも，論文の発表者は，こうした検索システムに拾われる可能性の高いようなキー・ワードを意識的に載せることも珍しくありません。「合理的期待」のイタチゴッコのようなものです。

しかし，現実には，キー・ワード検索とならんで，ジャーナルそのものの選別を行っていて，「重

（15） アリオ・クラマー（2010）前掲書，p.34。

要な論文は重要なジャーナルに掲載される」との前提で，優先的に読むべき論文を選びます。どのジャーナルが重要かということを決めるのは，ある種の「格付け」作業ともいえます。この「格付け」は，読むべき論文の選別にとって重要であるばかりか，論文が発表された際における業績の評価にも大きな影響を及ぼします。実際に，研究業績の評価には，発表されたジャーナルの重要度がウエイト付けされたかたちで加味されます。ある調査によれば，『アメリカン・エコノミック・レヴュー』誌を初めとするトップ10のジャーナルには，全体の16％の論文が発表されますが，これらの論文は，経済学のジャーナル全体の中で，36％の注目を集めているといわれます。[16] さらに，こうしたトップ10のジャーナルに論文が掲載される確率は経済学者の数の増加とともに，ますます低くなっています。その一方では，『アメリカン・エコノミック・レヴュー』誌に掲載された論文のうち，後代まで繰り返し引用されるような「古典」となった論文は，わずか1.8％であるとの指摘もあります。[17]

こうした権威あるジャーナルに論文を公表できることは，学界において同僚たちから注目される要因となり，それはまた，就職，昇進，テニュアの取得，給与の増額，研究費の獲得等，経済学者としての活動や地位の向上に深く関わっています。

しかし，トップ10のジャーナルを含めて，専門ジャーナルには，厳格な査読システムが存在し，何を掲載すべきか，あるいは，掲載不可とすべきかを審査する体制が確立されています。あたかも，フランス絵画における「サロン」（官展）のように。このことは，既に周知のことですが，ノーベル経済学賞を受賞したジョージ・アカロフの「レモンの定理」の論文は，投稿された当時，何度も掲載不可となり，アカロフは発表するジャーナルを見つけるのに苦労したといわれています。アカロフへのノーベル賞授賞理由としての業績には，情報の非対称性についての経済分析があり，その中には「レモン」の論文も含まれています。しかし，アカロフの事例は，必ずしも例外であるとはいえないのです。

一般に，制度というものは，現状維持的で，それまでに学会内において共有されているスタンダードや「支配的な」（dominant）考えを尊重することが少なくありません。ですから，このスタンダードから外れた「革新的」な論文は掲載を拒否されることも稀ではありません。そして，この厳然たる事実は，経済学の研究活動に少なからぬ影響を与えずにはおきません。トップ10のジャーナルに論文を発表することが，経済学者としての死活の問題だとすれば，当然のことながら論文の投稿内容は，掲載を認めてもらえるような学会内のスタンダードを尊重したものとなることは避けられないということになります。少なくとも，投稿論文は，想定上の匿名の査読者に対して説得的でなければなりません。経済学者に限らず，研究者は，このことを「ゲームのルールだ」と思っているよ

（16） アリオ・クラマー（2010）前掲書，p.151。
（17） アリオ・クラマー（2010）前掲書，p.152。

うにみえます。

3-4　主流派とハビトゥスの形成

19 世紀のフランスの絵画の世界には，美術アカデミーのような絶対的権力と権威を持った集団が存在し，何が正統な絵画かということを決めていましたが，はたして，現代の経済学にはこのような権力や権威を持った集団は存在するのか，という疑問も浮かんできて当然でありましょう。全体主義国家ならいざ知らず，言論の自由や研究の自由の保証されている国家においては，経済学研究の自由も保障されているはずである，と誰しもが考えます。しかし，現実には，結果として，ある学派の考え方が「支配的」なものとなるということはありえるのです。それは，権力による強制ではなく，教育や教化を通じた「ハビトゥス」（ブルデュー）の形成に関わっています。ここで「ハビトゥス」とよぶものは，「内面的な価値観」であり，それに基づいて発現する習性であり行動様式のことを指しています。

ここで取り上げたい経済学上の「支配的」な集団とは，新古典派とよばれるグループです。彼らはケインジアンのマクロ経済分析と，レオン・ワルラスの一般均衡分析へと収斂するミクロ経済分析（あるいはマーシャル流の市場分析を新たに洗練させたもの）を統合化した「パラダイム」を戦後間もなく創り上げ，その後，その「新古典派綜合」の理論的枠組みの洗練化を行ってきた，およそ 1940 年代から 1980 年代にいたる時期の経済学にとっては主流派として君臨してきました。特にアメリカではそうでした。その中には数多くの著名な経済学者が関わってきました。ノーベル経済学賞の初期の受賞者の多くは新古典派の経済学者たちです。そして，その代表的存在がポール・サミュエルソンであるとすることには，異論は少ないのではないでしょうか。サミュエルソンがこの学派の理論的発展に貢献したことはいうまでもありませんが，それとともに，ハビトゥスの形成において，彼の教科書『経済学』の影響は絶大なものであったと思います。「経済学は，稀少資源の配分と選択の問題の研究である」という命題は，経済学の入門講義に初めて接した学部生に刷り込まれます。さらに，マーシャルが初めて図式化した需要曲線と供給曲線が交差する市場メカニズムの 2 次元表現を経済学の教科書において多用したのもこのサミュエルソンの『経済学』でした。そして，より上級の経済学では目的関数の制約条件下の最大化こそ，経済学研究の本質である，と教えられます。モデルは何か，何が最大化すべき目的関数であるのか，この学派の影響を受け，その価値観を内面化した経済学者たちは，同じ発話と会話を続けるようになります。もちろん，個別の問題に関しては様々な論争や批判はありましたが，その基本的嗜好ともいうべき「数理化」と「計量化」への絶大なる信奉そのものは揺るぎないものがありました。[18]

それだけではありません。この新古典派の経済学者たちは，一般に，現実の経済政策や経済問題の解決に携わることにも熱心でした。連邦政府の各種委員や大統領直轄の国家経済会議のメンバーに就任する経済学者も珍しくありません。その意味で，新古典派は学会のみならず，大学の教育プ

ログラム，新聞や雑誌，あるいはテレビといったマス・メディアへの露出という点からも，突出していました。

その新古典派は，1980 年代になると急速にその影響力を失うようになります。そして，新古典派の理論的枠組みの柱の一つであるケインジアン・マクロ経済学の解体とミクロ経済分析によるマクロの再構築が始まるのです。このような変化とその遠因について，ジョージ・アカロフとロバート・シラーは『アニマルスピリット』の中で，次のように説明しています。

大不況を目の当たりにしたケインズは，経済行動のすべてが合理的な行動であるとはいえず，経済合理性以外の動機による行動も併せて存在している，と考えました。このような非経済的動機や不合理な行動を突き動かしているものが，「アニマルスピリット」とケインズがよぶものです。ところが，『一般理論』の公表直後から，「ケインズ支持者たちは，かれの大恐慌の説明の根底にあったアニマルスピリット——非経済的な動機や不合理な行動——をほとんど根だやしにしてしまった。そして『一般理論』と標準的な古典派経済学の知的距離を最小限にできる最大公約数的な理論を構築するのに必要な部分だけを残した。この標準的経済理論にはアニマルスピリットは登場しない。人々は経済的な動機だけで動き，合理的にしか行動しない。」[19]

いうまでもなく，ここで「標準的経済理論」とよばれているものは，「新古典派綜合」に他なりません。なぜこのようなケインズ経済学の意識的改竄を行うことが必要であったのか，アカロフとシラーは，次のように説明しています。第一に，既存理論になるべく近くしたほうが，（財政政策の重要性に気づく）転向者の数も最大化できる。そして第二には，当時の経済学者たちは，新理論を古い理論に基づいて理解できたからだ。[20]

しかし，この改竄という解決策は後に禍根を残すことになります。この意識的改竄から約 30 年の時を隔てて 1970 年代になると，新世代の経済学者たちは，「ケインズ思想に残るわずかなアニマルスピリットがあまりに些末で，もはや経済にとっては何ら重要性を持たないと言って批判した。もとの（新古典派による…引用者）ケインズ経済学の薄め方ですら不十分だというわけだ。この見方は現代経済学の中核となっていて，もはや経済学者はアニマルスピリットのことなど考えるべきではないと言う。…（中略）…アニマルスピリットは，思想史のゴミ箱に追いやられてしまった。」[21]

（18） ポール・サミュエルソンの教科書『経済学』について，初版の 1948 年版から 1985 年の第 12 版にいたるすべてのエディションについて詳細に比較検討をして経年変化を跡付けた論文として，Arjo Klamer (1990)“The Textbook Presentation of Economic Discourse”, in Warren J. Samuels (ed.)(1990) 前掲書，pp.129～154。なお，同じ論文集には，Jane Rossetti の論文，“Deconstructing Robert Lucas”, pp.225～243 が収められている。

（19） ジョージ・A・アカロフ／ロバート・シラー著，山形浩生訳（2009）『アニマルスピリット：人間の心理がマクロ経済を動かす』東洋経済新報社，pp.vii～viii（原著：George A. Akerlof and Robert J. Shiller (2009) *Animal Spirits: How Human Psychology Drives the Economy, and Why It Matters for Global Capitalism*, Princeton University Press）。

（20） ジョージ・A・アカロフ／ロバート・シラー（2009）前掲書，p.viii。

このアニマルスピリットをめぐる議論は，「一体，誰がケインズを殺したのか？」というミステリー仕立てのストーリーにおける犯人探しに繋がってゆきますが，どうも単独犯というよりもケインズは時間を隔てて2回殺されたというのが，アカロフとシラーの説のようです。この2回説によれば，まず，ケインズ経済学におけるアニマルスピリットは，新古典派綜合の中で薄められ，片隅に押し込められ，そして馴致されてきた。そして，古典派経済学の現代化を目指す新世代によってアニマルスピリットは完膚なきまでに消し去られてきた，ということになりましょう。

ここで重要な点は，主流派としての新古典派は，理論の整合性や統合性という目的のために，ケインズ経済学に潜む「野性」について独自の解釈を施し，綜合化を果たすことによって「異端」を吸収する「正統」としての地位を確立してきたということでありましょう。そして，その独自の解釈ゆえに，やがて，一層ラディカルな解釈によって取って代わられることになったのです。しかし，新古典派経済学は消え去ったわけではありません。「新しい古典派」とよばれる現代経済学の流れの中にも，新古典派の「ハビトゥス」は，そこここに生きているように思われてなりません。ちょうど，フランス絵画の世界において，アカデミスム絵画の美学の伝統が19世紀を通じて生き残ったように。

ところで，新古典派そのものが主流派となるためにはどのような「革新性」をもっていたのでしょうか。ただ単にケインズ経済学の到来という僥倖によってというだけでは説明がつきません。次にその点について考えてみることにしましょう。

4　説得的会話としての経済学

4-1　サミュエルソンの説得のレトリック

新古典派の経済学が，数理化と計量化を通じて，「経済学の一層の科学化」を実現しようと試みてきたことについては，多くの経済学者は同意するものと思われます。しかし，そこには，ものの話し方や説得的な言い廻し，読者に納得してもらえそうな全体的なストーリーの構成が全くなかったわけではありません。経済学における会話やレトリックの役割を研究してきたアリオ・クラマーは，その著『経済学は会話である』の中で，サミュエルソンが用いた説得のレトリックについて詳しく分析しています[22]。極めて興味深い分析といえるので，ここで，このクラマーの分析についてその内容の要約を述べたいと思います。詳しくは，原著や訳書で確認してください。

クラマーが取り上げるサミュエルソンの論文は，1939年に発表された「乗数分析と加速度原理の相互作用」という論文です。この論文については，次の2点の背景を説明するとわかりやすいかもしれません。ケインズの『一般理論』は，この論文の書かれた3年前の1936年に発表されたばかり

(21)　ジョージ・A・アカロフ／ロバート・シラー（2009）前掲書，pp.viii～ix。
(22)　アリオ・クラマー（2010）前掲書，pp.315～319。

で，大半の経済学者たちは，乗数分析と格闘していた時期であります。そして，1939 年時点で，サミュエルソンはまだ博士課程の大学院生であり，その指導教授はアルビン・ハンセンであった，ということです。

クラマーは，論文の冒頭の箇所に注目します。サミュエルソンの論文は次のように始まっています。

「政府支出の効果に関して〈乗数〉分析を行うことが，この重要な問題の解明に役立つということを否定する経済学者はほとんどいないであろう。」

ここで，乗数分析の重要性については，それを否定する経済学者はほとんどいない，というかたちで，経済学者の総意を明示しています。このような前提の置き方による議論の進め方は，サミュエルソンがそれまでに学んできた物理学においては常套の手段でありました。そして，サミュエルソンは続けて，

「にもかかわらず，この極端に単純化されたメカニズムがドグマ化したり，進歩発展を妨げたり，補助的とはいえ重要な関係を見えなくしてしまう危険があるのではないかと恐れる土壌があるようである。」

この段になると，サミュエルソンは，経済学の進歩発展とそれを妨げるものの存在を示唆しながら，彼の論文は，隠されたものを明らかにするものであることを暗示しています。そして，指導教授のハンセンからの引用を行いながら，ハンセンが取り組んでいる問題について解説をし，次のように続けています，

「ハンセン教授が一連の新しいモデルを開発したおかげで，状況はある程度改善された。そのモデルとは，乗数分析を加速度原理分析と相関分析とに巧みに結びつけたものである。」

この段について，クラマーは，「これほどまでにうまく，自分の指導教授に媚びへつらいつつ，その後でその問題の解決策がいかに自明なものであるかを示して見せる大学院生など見たことがあるだろうか。」と辛らつなコメントを述べています。[23]

これに続いてサミュエルソンは，乗数効果と加速度効果について記述した後，これらの二つの効果について数値を使ったいわばシミュレーションを次から次へと実行し，両効果の値を組み合わせて国民所得の試算表を作成します。多種多様な組み合わせに読者がうんざりしたところで，こう述べています。

「ここまで来ると，探索者である読者諸兄はわけがわからなくなっているのではないか。」

（23） アリオ・クラマー（2010）前掲書，p.316。

ここでは，サミュエルソンは読者に揺さぶりをかけているのだ，とクラマーはいいます。このような揺さぶりの後，「比較的単純な代数解析による，諸結果の統合」という「手品」が控えているからです。そして，脚注ながら，微分方程式を解くデモンストレーションが続き，わかりやすい図表が提示された後，景気循環を生み出すメカニズムを説明するという展開になっています。しかも，最後には，そのモデルが単純すぎている点で限界があることを認めながらも，今，手際も鮮やかに披露した数学的手法の揺るぎなさを高らかに宣言するのであります。

この論文では，単に乗数効果と加速度原理が説明されているだけでなく，記述的統計分析や，歴史や制度の分析が排除され，そのかわりに数学的モデルによる推論がいかに重要であるのかがデモンストレーションされているといってよいでしょう。その点こそが真に「革新的」であったといえます。

このサミュエルソンの論文について以上のような分析を行ったクラマーは，次のように述べています。

「最初，私はこの論文が物語性を排除していると考えていた。何と言ってもそこには消費者や投資家といったキャラクターが皆無なのだから，どんな筋立ても構想もできまい，と考えたのである。だが，この論文にもストーリーがある。私たち，経済学者についてのストーリーがあるのだ。同論文は，冒頭で私たちを同定することから始まる。私たちのうちで同意しない者はほとんどいまい，というくだりを覚えているだろうか。こうして私たちはかつがれたのだ。まず私たちは，進歩を望んでいるのだから『進歩を妨げるようなドグマに』陥ることを望まないはずだと釘を刺された。それから私たちは，私たちの一員であるハンセン教授でさえ解決できなかった問題を抱えていると告げられる。私たちは，その問題を解決したいではないか。そして私たちは，『わけがわからなくなった』感覚にけりをつけるために，自分たちが慣れていること，すなわち計算をするように促される。そうした後に，解決策が『比較的単純な代数解析』の形をとって登場してくる。どうやってこの流れに抵抗できようか。もしなおも何らかの疑問を差し挟む者がいるとしても，解放の道具としての数学を用いて私たちを自由にしてくれるという，一種の完璧さが，劇的なエンディングの形でもたらされる。一体それは何からの解放かと，あなたはなおも問い質すだろうか。要するにこの大変短い論文は，私たちに大いなるストーリーを語っているのである。すなわち，私たちの学問領域についてのストーリー，真摯な科学者としての私たちがなすべきことについてのストーリーを語っている。[24]」

このレトリックの視点による分析によって，新たな時代の幕開けを目前にした若き経済学者サミュエルソンが，既存の考え方や指導体制を受け入れながら（少なくともそう思われるようにしながら），そ

（24） アリオ・クラマー（2010）前掲書，pp.317～318。

れらをひっくり返すような革新的アイディアについて強烈なインパクトをもつデモンストレーションを行う姿が鮮明に浮かんできます。サミュエルソンが1930年代の終わりから1940年代の初めに直面したのは2つの革命を準備し，対応することでした。一つは，ケインズ革命であり，いま一つは，経済学における数理革命でありました。これらの二つの革命は，やがて新古典派的綜合の中で結実します。その後，サミュエルソンは，その博士論文を加筆修正した『経済分析の基礎』（『ファウンデーション』とよぶことも少なくない）を公刊しますが，この『ファウンデーション』は，新古典派綜合が昔日の面影を失った後も高い評価を受けてきました。新古典派のケインジアン流マクロ分析を葬り去った経済学者の一人であるロバート・ルーカスも，この『ファウンデーション』については高い評価を与えています。

クラマーのいうように，サミュエルソンの「乗数分析と加速度原理の相互作用」の論文は「真摯な科学者としての経済学者がなすべきことについてのストーリーを語る」ものでありました。しかし同時に，それは，数学的手法の圧倒的優位性を示すことによって，「真摯な科学者としての経済学者はいかに話す（会話する）べきか」についても語っているのです。

4-2　行き違う会話

経済学の実践とは，モデルの構築や証明を行うことを通じて，同僚の経済学者に対して，それがいかに有効であるのかを説得することだといえます。それには，ロジックとならんで，レトリックが駆使されているのは今みたとおりです。それと同時に，説得のための会話には，適切なディスコースのレベルを見極めることが重要です。ここでこの講演の冒頭で申し上げた経済学における三つのレベルのディスコースの話を思い起こしていただきたいと思います。すなわち，現実の経済に関するディスコース，経済学者の間における経済学に関するディスコース，そして，経済学における議論の成立そのものに関するメタディスコースの三つのディスコースについてであります。この点について，二つの具体的な事例をお話しいたしましょう。

まず第一の事例ですが，これはあるシンポジウムにおける出来事です。

2008年9月に起こったいわゆる「リーマン・ショック」の激震からまだ半年も経っていない頃，錚々たる日本の経済学者たちを集めた「グローバル金融危機」についてのシンポジウムが開かれました。連日，新聞の紙面が，サブプライム・ローン問題に端を発するグローバルな金融危機についての記事で埋め尽くされていた頃です。破綻に瀕した巨大金融機関に対して政府は救済を行うべきか，「大きすぎて潰せない」と「大きすぎて救えない」との間の選択について限られた時間の中での決断が迫られているという緊迫感に満ちた頃でありました。ですから，このシンポジウムには，アカデミックな経済学者や官庁エコノミストのみならず，報道関係者も多数押しかけていました。

冒頭，主催者側を代表して開会の挨拶に立った，ある高名な経済学者は，次のような主旨の話をしました。近年，経済学研究においては，ミクロ経済学が優勢となり，マクロ経済学は劣勢に立た

されてきた。しかし，昨年来のグローバルな規模における信用収縮によって，再びマクロ経済学が息を吹き返すのではないか。そして，ミクロとマクロの経済学が再び望ましいバランスを回復する好機となるのではないか。そのことを心より期待している。以上のような話でした。

この挨拶を聞いて，この経済学者は，百年に一度とよばれるような深刻な現実の経済問題の解決や処方よりも，経済学の望ましいあり方のほうが重要であるとでも思っているのかとその言を疑いましたが，大方の聴衆は，周到にこの挨拶を無視しているように見受けられました。早く本題の金融危機についての話が聞きたい，という雰囲気でありました。シンポジウムそのものの報告者の話はよく準備された内容で聴衆も話に聞き入っておりました。しかし，なぜ冒頭の挨拶ではこのような行き違いが生じたのでしょうか。それは，このシンポジウムは現実の経済に関する第一のディスコースを展開するものと期待されていたにもかかわらず，冒頭の挨拶は，経済学に関する第二のディスコースについてのものであったからです。参加していた多くの経済学者たちは，この第二のディスコースの意味は充分に了解していましたが，ノン・アカデミックな大半の聴衆にはどうでもよいことと聞こえていたに違いありません。

第二の事例は，経済学と他の学問領域との間の，やや厳しい会話です。1996 年，ポール・クルーグマンは，「国は企業ではない（A Country is not a Company.）」と題する論文を『ハーバード・ビジネス・レヴュー』誌に発表しました。(25)

その内容は，クルーグマン流の論争的（ポレミーク）なものでした。『ハーバード・ビジネス・レヴュー』誌といえば，マイケル・ポーターを初めとする企業競争戦略論者の牙城であります。そこへクルーグマンは乗り込んで，こう述べます。企業の経営実務家や競争戦略論者などと，経済学者は，知的なバックグラウンドの全く異なる，別種の人間である。一国の経済の運営は，特定の競争戦略なるものではなく，一般原理に基づいて行われなければならない。そういって，クルーグマンは，国の競争力論や戦略論なるものを一蹴したのです。しかも続けて，クルーグマンは，もし，企業の実務家が，国の経済運営について何かいいたいことがあるのであれば，少なくとも経済学の教科書を勉強してからにして欲しい，と切って捨てます。ここでクルーグマンのいうところの「一般原理」とは，ミクロとマクロの経済理論のことを意味していることは疑いを入れません。

ここでクルーグマンが強調したかった点は，こういうことでしょうか。国民経済や，それらから構成される国際経済について論じるためには，経済学の言葉を正確に使わなければ意味がない。現実の国民経済は，いかなる巨大企業よりも遥かに複雑なシステムであり，まして，国際経済となると一層複雑であり，そうした複雑なシステムを扱っているのが経済学である。経営学者や競争戦略論者は経済についての専門家ではない。クルーグマンは暗にそのように示唆しているようにみえま

(25) Paul Krugman（1996）“A Country is not a Company”, *Harvard Business Review*, 1996, January-February also in Krugman (1996) *Phantasms in Capitalism*（邦訳：ポール・クルーグマン著，北村行伸訳（1998）『資本主義経済の幻想』所収，ダイヤモンド社）

す。そして，経済に関する議論は，あくまで経済学の言葉で，しかも適切な言葉使いによってでなければならないという強い思いも感じ取れます。いうまでもなく，これはアカデミスム経済学の立場からの本音でもあります。恐らく，クルーグマンのこの議論を聞いて，ほとんどの経営学者や経営実務家は納得しないことでしょう。それに対して，多くの経済学者はむしろ当然ではないかと思うに違いありません。

しかし，なぜクルーグマンは，競争戦略論者の牙城にまで乗り込んで，このような議論を展開したのでしょうか。これは推測の域を出ませんが，クルーグマンの真の聴衆は別のところにあったのではないかと想像されます。国の競争戦略なる「怪しげな理論」に対して，経済学の立場からの反撃であるとともに，そのメッセージを，経営学者に対してではなく，政治家や官僚，ジャーナリストや広く国民一般に対して届けようとして，最も効果的な場を選んだのだ，と思われるふしがあります。非常に高等なレトリックの実践といってもよいでしょう。この事例では，ディスコースは直球のようにみえながら，打者の立つ位置によって変化球にみえるようなものです。まともに打ちにいけば必ず空振りとなるようなくせ球です。

4-3　会話を阻むもの

このように，経済学者の実践活動は，議論であり，会話であるとするならば，経済学が発展し，さらには，広く社会のために有用な学問として尊重されてゆくためには，これらの議論や会話を一層深め，さらなる拡がりを求めてゆかなければなりません。しかし，経済学の現状には，必ずしも楽観していられないような状況がそこここにみられます。つまり，経済学の会話を阻む要因が潜んでいるものとみられるからです。そのような会話を阻む要因としては，次の三つのものがあると考えられます。

その第一は，生産的な会話を成り立たしめる前提としての，会話者同士が共有する関心の領域が次第に狭くなってきているのではないかという点です。経済学者の多くは最早，経済学の歴史や基礎的方法論にほとんど関心を示さないようになってきているように思われます。若いマクロ経済学者の中には，ケインズのオリジナルな著作を一度も読んだことのない人も珍しくありません。また，一流大学の経済学部や大学院の中にも，そのカリキュラムから，経済学史や経済学説史，あるいは，経済思想史や経済哲学，さらには経済史まで，追放しようとする動きがあります。経済学の基礎的方法論についても，科学哲学や科学方法論の最先端の議論に充分についていけるだけの研究者は少なくなってきています。若い経済学者には経済学の方法論の論議は，ミルトン・フリードマンの論文「実証経済学の方法論」によってすでに片付いているものと考えるものもいますし，大半はフリードマンの論文の存在についてさえ知りません。また，影響力のある経済学のジャーナルでは，方法論や哲学に関する論文は掲載されにくいということもあるかもしれません。こうした無関心は，様々な要因によって生じたものと思われますが，その一つは，経済学研究における分業の深化ではない

表１　成功の要因

	非常に重要	やや重要	重要でない	わからない
数学が優秀	65	32	3	1
特定の分野に精通	57	41	2	0
問題解決が得意でスマート	37	42	19	2
著名な教授とコネを持つ能力	26	60	16	9
実証的研究に関心があり得意	16	50	23	1
経済学文献に広い知識がある	10	41	43	5
経済に関する知識が十分である	3	22	68	7

アリオ・クラマー（2010）前掲書，p.117

かと考えます。経済学の科学的研究が進むにつれて，前にお話しした「推測と反駁」（ポパー）における，仮説の提示という作業と仮説の検証という作業が，分業化され，効率よく行われるようになってきました。前者を行うものは，いわば仮説の生産者であり，後者に従事するものは仮説の消費者ともいえるでしょう。問題は，仮説をめぐる需給均衡ということになります。その結果，計量経済学への需要が増大するとともに，仮説の供給側である理論研究においては，「仮説の検証可能性」を示唆することだけで充分で，実際の仮説の検証は不要とするような立場さえ興ってきています。理論物理学のような「厳密科学」においては，実証（実験）結果の「再現性」や「予測可能性」という厳しい制約条件が課されていますが，経済学にはそのような条件は必ずしも課されてはいません。そこでどういうことが起こるかといえば，分業の工程間，すなわち，仮説の提示と仮説の検証という作業において相互に無関心が生まれるということになります。リサーチ全体のプロセスを見渡す視点の欠如といってもいいでしょう。それでは，同じ経済学の内部における会話もなかなか成立しにくくなってしまいます。

会話を阻むものとして，第二には，経済学者として成功するための要因について，若い研究者たちがどのように考えているのか，という点があります。表１は，1987 年におけるデヴィッド・コランダーとアリオ・クラマーによる，全米最上位の経済学研究科に在籍する大学院生への調査結果であります。(26) これによると，経済学者として成功する要因のうちで最も重要なものと看做されているのは，数学が優秀であること，であり，ほぼ全員が数学は重要であると思っている，その反面，ほとんどの経済学の大学院生たちは，現実の経済についての理解や知識は経済学者として成功するための重要な要因とは思っていない，また，経済学に関する幅広い文献的知識よりも，特定の専門分野に精通していることのほうが重要であると思っている，ということになります。現実の経済よりも，あるいは，経済学の幅広い知識よりも，特定の分野における数学などの技術的スキルの洗練こそが成功の鍵を握っていると思われているとすれば，経済学の内部における会話の道は次第に閉ざ

（26） アリオ・クラマー（2010）前掲書，p.117。

されていってしまうということになりましょう。これに関連して，ロバート・ハイルブローナーとウィリアム・ミルバーグは，次のようにいっています。

「何人かの経済学者がこうした分析的な精緻化の強迫観念がますます増大していることに気づいていた。すでに 1975 年にロバート・ゴードンは，アメリカ経済学会の会長講演で，経済学者たちに,「適切さ」よりも「厳密さ」を重視することの危険性について警告していた。しかし，そのような初期の警告は気にもとめられることはなかった。アラン・ブラインダーは次のように書いている。

“合理的期待革命は野心的な若い専門技術者にとって思いがけない幸運であった。それは，マクロ理論を一層抽象的で数学的な方向に押しやっただけではなく，その結果として新しいスタイルの計量経済学をもたらしたのであり，これは，それが取って代わろうとしてきた従来の方法に比べて技術的要求度がはるかに高いものであった。”[27]」

ここでいわれている「厳密さ」への傾注と視野の狭隘化は，経済学の発話や会話の形態を，専門的で技術的なものとし，グループ内の内向きの議論をもたらすのではないかと懸念されるのです。厳密化への要請の下における理論構築はますます「合理的経済人」の概念の洗練化を推し進めます。その結果,「アニマルスピリット」は存在しないものとされます。しかし，そもそも，この「合理的経済人」への執心とこだわり自体は，合理的には説明できないことを思い起こしてみるべきではないでしょうか。

ここで取り上げた表 1 の調査は，1980 年代の半ばに行われたもので，すでに 20 年以上の年月が経過しています。この 20 年間に経済学も，そして，経済学の大学院生の意識も変化しているのではないかと思われるかもしれません。そうした疑問に答えるためには，今一度同じような調査を行う以外にありません。はたして，こうした傾向は変わってきているのでしょうか。ただ一つだけ注意を喚起しておくべきことは，この調査が行われた 1980 年代の半ばにアメリカのエリート大学院で経済学を学んだ日本からの留学生たちは，現在，日本の経済学界で指導者的立場にいるということです。タイム・ラグをともなって，当時の気風は長い影となって今もなお尾を引いているものと考えてもおかしくありません。このことは，かつて明治時代に国費留学生としてフランスの美術アカデミーで絵画の勉強をした日本の洋画の先駆者たちと，その後の日本における洋画教育のあり方について思い起こさせます。

会話を阻む第三の要因としては，先の大学院生の意識調査にも表れている，現実の経済との関わりであります。これまでにも述べたように，新古典派の経済学者は積極的に現実の経済政策と深く関わってきましたし，また，シカゴ学派の長老たち，すなわち，フリードマンやスティグラー，ベッ

（27） R・ハイルブローナー／ W・ミルバーグ（2003）前掲書，p.142。

カーやコースたちも少なくとも現実経済の動きについては重大な関心をもっておりました。しかし，ロバート・ルーカスとなると，話は違ってきます。そのことは，ルーカスに対する，ロバート・ソローやジェームズ・トービンらの新古典派の経済学者たちの感情的ともいえる反発によってもうかがい知ることができます。[28] そこでは会話が成り立たないのです。

ハイルブローナーとミルバーグは次のようにいっています。

「（経済学の理論化の方向について），われわれがポスト・ケインズ時代までの経済学に存在したと見る特質のうちの第一のもの——すなわちそれらが理論と「現実」との関連に絶えず明確な関心をもっていたということ——に，今や明瞭に示されている。それとは対照的に今日の経済学の特色は，それがこのような問題に対して異常なまでに無関心だということである。その最先端部分での現代の「高度な理論化」が遂げている非現実化の度合いたるや，匹敵するものとしては中世のスコラ哲学しかないほどである。[29]」

「非現実的なもの」の象徴がスコラ哲学かどうかは議論の余地は充分にありますが，ここで注意しておかなければならないのは，ハイルブローナーに代表される世代の経済学者たちは，良きにつけ悪しきにつけ，新古典派経済学と同世代を生きてきたという事実です。あるいは，ケインズ革命からケインズ経済学の解体の時期といってもよいでしょう。この時期に特徴的なことは，経済における政府の役割への評価と期待が一貫して大きかった，ということです。そして，この世代の経済学者の多くは政府の経済政策を介しても経済の現実と関わりをもっていたといえます。しかし，「新しい古典派」と呼ばれる理論経済学派は，むしろ古典派経済学における市場分析を一層洗練化し，再構築された市場の概念とそれに基づく理論にとって意味のある限りにおいて現実の経済との接点をもとうとしているといえます。別のいい方をすれば，第二のレベルのディスコースに専念しているともいえます。

高度の理論化や抽象化が非現実化をもたらす，という点はこれまでにも度々指摘されてきました。この言明に対して，無視を決め込むことも可能です。もともと，批判される立場と批判する立場では現実の経済への関心のあり方に「非対称性」が存在しているものと考えられます。しかし，それでもなお，経済学の中における会話を促すためには，高度の抽象化や理論化が非現実化をもたらすという言明そのものを検証してみるのが一番ではないかと思われます。現在，経済学における計量的手法の高度化は，検証できないものはないといわれるほどに進化してきています。「スコラ化度」なるものを設定した上で，有力なジャーナルの論文の過去 20 年分について計量分析すれば，「非現実化の仮説」はデータによってサポートされるのか否かが判明します。なぜ，こうしたプロジェク

（28） アリオ・クラマー（2010）前掲書，pp.44～45。
（29） R・ハイルブローナー／ W・ミルバーグ（2003）前掲書，pp.5～6。

トにアメリカ経済学会や日本経済学会で取り組まないのか不思議です。現代経済学は，情報通信革命を経て，その分析用具を急速に洗練させてきましたが，その用具の矛先を経済学自身に向けようとしないことは未だ謎といえるでしょう。

結びのひと言

このように，経済学研究の実践においては，どの教科書にも書いてあるように，理論モデルの構築や計量的検証作業を行うことと並んで，どの教科書にも書かれてはいない，説得的に語ることや，適切な会話を続けることが実際に行われています。そのことを二つの合わせ鏡の世界の中から浮かび上がらせることが，本講演の目的でありました。

鏡の国においてはアリスも会話を続けることに苦労したようです。ハンプティ・ダンプティとのやりとりは次のように進みます。

> 「ぼくがことばを使うときは，だよ」ハンプティ・ダンプティはいかにもひとをばかにした口調で，「そのことばは，ぴったりぼくのいいたかったことを意味することになるんだよ。それ以上でもそれ以下でもない」
>
> 「ただ，問題は，そんなふうにことばにやたらいろんな意味をもたせていいものかどうか」
>
> 「問題はだね。どっちが主導権をにぎるかってこと——それだけさ」[30]

会話の主導権をにぎるということはどういうことでしょうか。現代経済学であれ，あるいは19世紀のフランスの絵画の世界であれ，パラダイムの変化とは，実は，会話の主導権の交替を意味するものと思われます。経済学の世界もまた否応なく会話の世界なのです。そして，その会話の世界では常に会話の主導権をめぐる議論が繰り返されています。ですからそのような会話に参加することが経済学者となるための第一歩となるのです。そのことに関して一つだけ提案があります。それは大学院レベルの経済学の教育プログラムを三つの異なるレベルのディスコースのタイプに再編してみることです。そして，その中でも特にメタディスコースにおける会話と説得についてきちんと教え込むことです。それは単に経済学の自己理解を深めるだけではなく，今日，広く要請されている学問領域横断的研究や学際的研究の推進にとっても不可欠なものだからです。

「鏡の国」の話がいつしか「不思議の国」の話になってしまいました。

ご静聴有難うございました。

（経済学部教授）

（30） ルイス・キャロル（1994）前掲書，p.112。